

中間発表によせて

遠い昔、洞窟に壁画を描いていた頃の人類に思い馳せる。

当時の人たちはそこで何を思い、それらを描き残したのだろうか。

人が世界を理解すること。

彼ら、彼女らは、描くことによって世界を明らかにしていたのではないか。

自分たちが受け取ったその未だ未分化の所与に対し、壁面に引かれた輪郭線を持ってして形を与え、理解する。

...

そのような営みは現代においては明示的に行われなくても、われわれは常に意識の上で世界に輪郭を引き、それによって存在者を存在者たらしめている。

しかし、その輪郭を引く行為は決して恣意的に行われているわけではないであろう。われわれは成長過程において言語という名の共時的差異の体系、文節の体系へと参入し、それに規定されつつ世界に輪郭を引いているはずだ。(そこから逸脱した形で輪郭を引くということは精神病だということである)

だが、規定されているとはいえ、その掟は不易で固定されたものでも接触不可能な超越的なものでもない。それはわれわれを規定しつつ、われわれの営みによって改変していく。

そのような営みを芸術と呼ぶのだろう。その営みより生じたものがもつ、その改変性のわれわれに対する在り方を、ロラン・バルトは「プンクトゥム」と呼び、フランシス・ベーコンは「神経細胞を直接刺激する」と言ったのだ。

そしてその文節体系は、その輪郭を引くこととなる当の主体が在る以前から在るのだ。それはすなわち、それらが死者からの贈与であり、今は亡き者達が分節改変を繰り返すことによって成されたものであるということに他ならない。

そのような見地に立つ時、現存する最古の分節を確認できるのが洞窟壁画であろう。われわれは4万年前に用いられていた言語を知らない。しかし、その言語によって成された分節は垣間見る

ことができるのである。

本作「idea」にシリーズにおいて私は、そのような象徴的分節である洞窟壁画に対し、作家である私が参入した分節体系において、更なる分節を施した。

このような分節に分節を重ねる自己言及的行為によって、普段意識されることないわれわれのこうした根本的営みを前景化し、形而下の事物を規定している形而上学的輪郭の表現を試みる。

…

世界に輪郭は実在しないと言われることがある。

しかし、わたしはそれに真っ向から反対したいと思う。

われわれが実在物だと考える事物というのは、われわれが世界に輪郭を引くことによるのみ在るのだ。つまり、その輪郭が別の引かれ方をされたならば、それによるのみ在る事物はその存在資格を失う。

しかし、輪郭はどのように引かれようとも常に輪郭として在るのだ。それはすなわち、それら事物よりもその輪郭の方こそが実在しているのだということを示していよう。

その様な輪郭論的見地に立つならば、われわれが普段実在物として接しているそれら事物はその存在容態を大きく変え、輪郭によって仮構されることによるのみ在る、極めて存在性の希薄なものとして現れてくるであろう。

本作「void」シリーズでは、存在者のそのような存在様態の表現を試みる。

本シリーズにおいて私は、写真をハーフトーン化して画面に定着させた。写真というメディアは罗兰・バルトが述べるように、レフェランスの存在をそのメディアの前提条件として持つものであろう。しかし、ハーフトーン化されたその像は写真的グラデーションを保持しつつ、それが何であるのかの把握を拒絶する。写真である以上、それが何かであるはずにも関わらず、そこに辿り着くことはできない。

それはすなわち、それが非本質的に在るのだということを示していよう。存在とは、本質(それが何であるか)を前提とする。しかし、ここに本質はない。非本質的に、現象として、ただ弱く在るだけである。

...

これら二つのシリーズは、実体を現象へ、本質を差異へと読み替えていく営みなのだ。

私は、私が抱える、絵画を介して思考されたこのような東洋的形而上学を、西洋的コードとコンテキストの中で意味として立ち現したい。

菊池遼